

読書通信



No. 124

① 複式簿記をほとんど理解していない政治家や官僚や経営者は数え切れないほどいる。それでいて財政危機がどうか今期の利益がどうかと言うのは恐ろしいことである。簿記会計の基本を高校か大学で必修とすることが日本の将来に不可欠と思うが権力者がその気になることはないだろう。権力者は帳簿が嫌いだから。

ジェイコブ・ソール『帳簿の世界史』(文藝春秋、2106円)の描く世界史は異色かつ興味深い。帳簿というのは複式簿記と関連帳簿のことで、つまりは財布および財産の中身である。

七つの海に君臨したスペイン帝国がなぜ衰亡したのか、フィレンツェのメディチ家が隆盛から没落へ転じた背景、ルイ16世が断頭台に送られた訳、といった具合に帳簿の果たした役割によって世界史のさまざまなエピソードが語られて飽きることがない。読むのに簿記の知識は必要ないけれど、簿記の威力に感服しないではいけないはずだ。歴史のエンジンは人間の欲望かもしれないが、エンジンを逆回転させないためには帳簿が重要だと改めて知るだろう。

② 一流大学を出て有名企業に勤めている人は一般にエリートとみなされる。では有名企業はいつも勝ち組なのか。そんなことはない。世の中にはまるで仕事ができないエリートが少なくないからだ。山崎将志『残念なエリート』(日

経プレミアシリーズ、918円)はエリート社員が陥りやすい落とし穴の例と、それをどう防ぐかのヒントを提供する。計画を重視し、先入観と常識で理屈をひねり出し、自分流に考えて相手(あるいは顧客)の立場から考えないエリート社員の実例が次から次へと登場するので、自分が当てるまるかどうか、考えながら読むのも一興だろう。エリート社員では全くない人に役に立つかどうかはその人次第である。

③ 向谷匠史『説得は「言い換え」が9割』(光文社新書、799円)は著者が僧侶で空手師範で作家、しかもヤクザに詳しいというので読んでみた。いわゆるノウハウ本であるが、どうやって人を説得するか、どうやって論点をひっくり返すか、動かない部下を動かす法、迫ってくる

る相手をいなすには、など要するにレトリックによって脅したりすかしたり励ましたりの実例がたっぷり紹介される。実例を示さないで言うのもいかがかと思うが、言葉のヒントがたくさん詰まっついていて、参考になるはずである。

④ 認知症は明日のわが身かわが家族か、どうにも他人事ではない。ある意味でおカネ以上に深刻な問題である。野村進『解放老人』(講談社、1404円)は重度認知症治療病棟に長期間入り込んでお年寄りの「天真爛漫な」日常を体感し、彼らの行動と心の奥とに深い洞察をする稀有のルポルタージュで、知られざる病棟の実態を見事に描き出している。深刻な状態の老人たちでありながら、決して暗い話になっていないのは著者の人柄と職業意識の賜物だろう。(純)